

おかえり

特集

◆二地域に暮らして
～匹見と広島の架け橋に～

◆交流から滞在、そして定住へ

- 農家民泊
- 田舎体験・ボランティア
- 田舎暮らし体験施設
- 就業支援・住まい
- 空き家に関する各種事業



二地域に暮らして

～匹見と広島の架け橋に～



故郷の匹見町落合の矢尾集落と広島市安佐北区の二地域で1年の半分ずつを暮らす齋藤仁さん(78)と妻の小夜子さん(77)。

「広島は借り住まい。本拠地は矢尾なんよ」。そう話す仁さんは、故郷の人口が激減する中にあって、「一人でも多く集つて賑やかになれば」と、年3回の祭りや7月の道路清掃作業に小夜子さんと参加。「自分が故郷に貢献できること」に取り組んでいらっしゃいます。

【広島に出稼ぎへ】

仁さんは中学を卒業すると、大工だった父・武市さんの影響もあり、大工見習をしていましたが、修行3年目に病気にかかり、一旦は大工の道から離れます。しかし、昭和33年、不慮の事故で武市さんが亡くなつたため、突如一家の大黒柱となつた仁さん。現金収入を求め、大工だった叔父とともに、広島に出稼ぎへ。

再び大工としての道を歩むことになりました。農繁期には矢尾に帰つて、家族とともに農作業で汗を流し、長男とし

て4人の弟妹たちの結婚も見届けました。

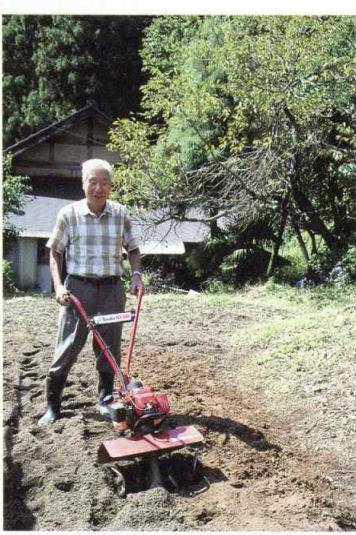
ご自身は昭和38年、小夜子さんと結婚。昭和41年には職場と矢尾の両方に通いやすい広島市安佐北区に自らの手で新居を建て、その後も農繁期には小夜子さんと矢尾に帰り、母のチサヨさんを助ける生活を続けてきました。

【田舎と都会の生活】

体を動かしていないと落ち着かない仁さんは、退職した後も大忙しです。

平日は広島で、子どもたちの見守りのため登下校時に交差点に立ち、学校が休みになる週末と長期休暇に、車で片道1時間25分かけて矢尾へ帰ります。

仁さんが改築した納屋に寝泊り



農作業に汗を流す仁さん

し、今は亡きチサヨさんから受け継いだ野菜作りや、退職後に始めた畑わさびや原本しいたけ栽培に汗を流します。のんびりする暇はありません。

「広島にいると、することがないでの夜眠れなかつたり…。やつぱり田舎がいいね」と仁さん。一方の小夜子さんは、都会育ちで大の虫嫌い。田舎と都会との生活を50年以上繰り返してきた今も虫嫌

いに変わりはありませんが、「矢尾の空気の綺麗さには毎回感動」しているそうです。

【原点回帰】

平成28年10月2日。集落の氏神を祀る河内神社に、仁さんの姿がありました。この日は例大祭。集まつたのは計8名。

日ごろ矢尾に暮らすのは3世帯5名(平成28年9月末現在)。

人手があり、役の持ち回りができる他の集落と違い、町内外に暮らす出身者の手も借りながら、集落全員で行事を守つてきました。今秋は更に人手が足りなくなり、例大祭時に太鼓を打てる人がいなかつたため、仁さんに依頼が入つたのです。

秋晴れの下、例大祭は無事終了。その後、弁当を囲み、交流が行われました。

地域の皆さんも齋藤さん夫婦の帰りを心待ちにされていました。「仁さんがおりんさつたおかげで、終えることができました」。そう胸をなでおろし



例大祭で太鼓を打つ仁さん(中央)

たのは、自治会長の長野加市さん(82)。齋藤幹男さん(59)は、「人が減つても救いなのは、ふだんは町外に暮らす出身者が、農業をするために定期的に矢尾に足を運んで、姿を見せてくれること」。

「幼少期を過ごした場所は、心の故郷。原点回帰ということなんだろうね」と大久保剛さん(62)。

「本来、祭りは自然に感謝したり、人間らしい生き方を考える大切な機会。集落の人々の交流を深める場としても、できる限り続けていくべきだね」と続けました。

【淡い期待】

今は無き隣りの葛木集落との分かれ道にあつた旧落合小学校の分校に通っていた仁さん。学校が終わると、友達と孟宗竹でスキー板を作つたり、車力に乗つて遊んだり、川遊びをしたり…。「今では何もかもが良い思い出。でも、人口減少という大きなうねりは止められないね」とぼつり。

だからといって仁さんはこの現状を眺めているだけではありませんでした。



長野加市さん(左)と仁さん

「もしかしたら、いつかまた行ってみたいと言つてくれるんじやないか。一晩泊まる家を建てたいと言つてくれる人が出るんじやないか」。そんな淡い期待を持つて、「自分が故郷に貢献できること」。ただただそれだけを考えて、仁さんは矢尾と広島とを行き来する暮らしを続けています。

『齋藤さんは、帰るところがあつて、ええのお』。そう言つて羨ましがる広島の知人友人に「匹見は徹底的に田舎じやけえ、一回来てみい」と声をかけ、矢尾や温泉を案内したり、春には山菜採りをしたり…。冗談半分で、「土地が空いているから田んぼもできる」と言つてみたり…。これまで少なくとも20名を匹見に呼びよせたそです。

～交流から滞在、そして定住へ～



ちょこっと匹見を体験したい方は…

◇農家民泊 …匹見町には、3軒の農家民泊があります。



民泊「三四四」

《体験内容》

ものづくり体験（布ぞうり、かご編みなど）、山菜採り、田舎料理体験、春・秋農業体験など

■宿泊および調理体験料 6,000円

■益田市匹見町道川イ214

Tel/Fax. 0856-58-0020



農家民泊「内谷とちの郷」

《体験内容》

わさびの苗植え・収穫体験、山菜採り、料理体験（こんにゃく、わさびの醤油漬けなど）、もちつきなど

■宿泊および調理体験料 6,000円

■益田市匹見町石谷口561

Tel/Fax. 0856-56-0589



農家民泊「長尾原のへや」

《体験内容》

農作業体験（稻刈り、牛の世話など）、苔玉作り、農産加工品作り（漬け物、こんにゃく、ようかん、ジャムなど）

■宿泊および調理体験料 6,000円

■益田市匹見町澄川イ789

Tel/Fax. 0856-56-0471

◇田舎体験・ボランティア

【田舎体験】

匹見町では登山や雪山歩きなど、豊かな自然を生かした体験をはじめ、「田舎料理体験」や「ものづくり体験」、「収穫体験」「歴史・文化体験」などを楽しむことができます。



わさび収穫体験

【ボランティア】

少子高齢化が進む匹見町では、集落内の共同作業やイベント開催などが年々困難になっています。そこで、地域外の方にボランティア会員登録をしていただき、軽度の作業に携わってもらうことで、田舎と都市との交流を図っています。



ブルーベリー摘み取り作業

もっと匹見に滞在したい方は…

田舎暮らしの体験や、農林業またはその他の産業に関する技術や経営ノウハウを習得するために滞在可能な施設として、期限つきのお試し施設「益田市立田舎暮らし体験施設」を開設しています。

《使用者の条件》

- (1) 益田市への移住を強く希望し、田舎暮らしを体験しようとする人
- (2) 農林業その他の産業に関する技術や経営ノウハウの習得のため研修を受けようとする人

《使用期間》

1ヶ月以上3年以内

《使用料》

平成28年9月現在



※1部屋に1台分の駐車スペースを用意しています。

《使用について》

施設の使用については、市長の許可を受ける必要があります。使用希望の人は、「田舎暮らし体験施設使用申込書」を下記までご提出下さい。

（空室状況等詳しくは、益田市のホームページをご確認くださいか、下記までお問い合わせ下さい。）

◎ 定住・U I ターンに関する問い合わせ先

益田市匹見総合支所 地域づくり推進課
〒698-1211 益田市匹見町匹見イ1260

電話 0856-56-0305 FAX 0856-56-0362
ホームページ <http://www.city.masuda.lg.jp/teiju/>

益田市空き家改修事業

「空き家バンク制度」の住宅を利用して定住する場合、その住宅を改修した際の経費の2分の1以内（上限50万円）を①空き家の購入者または入居者（U I ターン者に限る）、または②U I ターン者と賃貸借契約を締結した空き家の所有者に補助します。ただし、経費の額が30万円以上であるものに限ります。

※この他にも、空き家や住宅に関する補助制度があります。